

てらこやも9年目を迎えた。

8年を経て、子どもたちと向き合ってきて、スタッフと話し合ってきて、この言葉の意味を深く深く感じている今がある。

開設当初、スタッフもそれぞれの分野のスペシャリストではあったが、こういうタイプの学校のスタッフの在り方としては、未経験の人間ばかりだった。理念と在り方は、こうやっていこうと決めていたことはあったが、学校の中身、日々の詳細、そして子どもとの関わり方も、すべてが手探りでスタートだった数年間。

たとえば、地球子舎で大事にしている

「ありのままの相手を受け入れること」

だけど、相手の心に寄り添うを意識しすぎると、自分の心が置き去りになる。

「受け入れる」を意識し始めて最初に陥りがちなのが、大抵その状態だ。

「100%認める、受け止める」ことと「言うとおりにする」ことは、ぜんぜん違うのだけど。大人のいうことをきくこと、まわりや相手に合わせることをよしとする社会の中で育ってきた私たちには、そうでない関係を育もうとするとき、それがけっこう難しい。

子どもの意見を聞きすぎて、場の軸がぼやけていたり、

「受け止める」を意識しすぎて、自分のなかに沸き起こってくるものに無意識に蓋をしてたり。

「ありのまま」とは、「対等」とは、どういうことなのか。

これは言葉で伝えて伝わるものではない。

自分の中で得心がいて、はじめて自分のものになる。

自分に問いながら、話し合いながら、

トライアンドエラーの日々の中で、

それぞれのタイミングで、いつしかそれを自分の中に落としていってくれた。

経験と場が育ててくれたのだ。

それは、うわべの、頭の理論での、ではない確かな土台。

そして今、安心して場をまかせられるスタッフがいる！

僕自身にとっても、大きな学びの8年間だった。

当初、まだ経験も関わり方も学びの途上のスタッフに対して、

こう関わってほしい、もっとこう動いてほしい、

と在り方への不信や場全体への不安がちらついたり、

伝えても伝わらないことのもどかしさを感じたり、

できてない部分についてフォーカスがいくことも多々あった。

同時に自分の中には、

不信や不安にフォーカスがいく状態は、自分の望む自分の在り方じゃない、

自分がこうがいいと思っている関わり方、が必ず正しいとは限らないんじゃないか、

自分が信じ込んでいること以外にも、たくさんの可能性があるなら、

それをみてみたい、という思いもあった。

だから、そのときどきの状況、その人の選んだものを受け入れることを選んだ。

待つこと、信頼することを選んだ。

不足や不安、レッテル、思い込みが浮かぶたびに、選び直した。

プロセスを信頼することをたくさん練習させてもらった。

そして、今の地球子舎がある。

かるやかに自分になってきたスタッフと子どもたちがいる。

ありたいようにできていない場面もたくさんあったけど、

大丈夫だった。



27

